



# 共同通信



2011年6月30日 178(388号)

日本基督教団 西宮共同教会月報 〒662-0834 西宮市南昭和町10-22  
TEL0798-67-4691 FAX 0798-63-4044、Email : koudou@gamma.ocn.ne.jp  
<http://koudou.jp/> 振替 01170-3-4901

## To tell the story 78 「なんてことないメダカ工房の日常・・・」

16年前の兵庫県南部大地震の時、この事態をこの渦中に見続けたいと思い、直感で西宮共同教会の菅澤先生のところにかけつけました。

そこでの現実を見つめながら、菅澤先生が書く「じしんなんかにまけないぞ！こうほう」の「自称」編集長として、また兵庫県南部大地震ボランティアセンターのスタッフとして活動を続けてきました。2年前、自分の住む町に拠点を持ち、地域の人たちとつながりたいと願い、宝塚小林にメダカ工房を開きましたが、その後もボランティアセンターの活動は続けてきました。

3月11日、想像を絶する大地震・大津波そして起きてはならないはずだった原子力発電所の過酷事故で、菅澤先生は16年前くらいの速さで「こうほう」を書きはじめることになり、私もまた「自称」編集長として「こうほう」に関わることで、現実から離れないようにすることで精一杯の日々です。メダカ工房はそれまでと変わらず月・木・金・土の営業をしています。なんてことないメダカ工房の日常は、メダカが産卵、孵化し、おもてを通る人たちがのぞきこんで声をかけてくれる、そんな感じです。

メダカの話がきっかけで自然の話

時代にふり回されるのではない  
あの時 心を躍らせて生きた  
後悔に 身をふるわせたこともある  
笑い 泣き 歯ぎしりをした  
今日 こんな決意をしたという

自分の人生を語ってほしい、  
自分の人生を語ってほしい、  
自分の人生を語ってほしい、  
自分の人生を語ってほしい、  
自分の人生を語ってほしい

や原発事故の話、そして私たちはどう生きるべきかの話になったりもします。メダカ工房が、ボランティアセンターの活動をとおして被災地・被災者の支援をしていることに関心を示される方もいらっしゃいます。

メダカ工房は、兵庫県南部大地震ボランティアセンターの活動に協力しています。そのボランティアセンターの主な働きは

1. 福島市、伊達市、二本松市、郡山市などの子どもたちに防塵マスクを届けています（5月19日現在、7000枚）。
2. 国産小麦粉、白神こだま酵母を使い、六甲の本当の自然水でこね、マキ窯で焼いたパンを届けています（5月20日現在、580本）。
3. 折りばらを届けています（5月20日現在、320個）。

被災地でマスク、パン、折りばらを届けているのはボランティアセンターが派遣した庄司宜充さんです。メダカ工房は「折りばら」を折ることに協力しています。メダカ工房の日常で、折りつづけている折りばらが、被災地の人たちに届けられています。メダカ工房によせられた被災地支援のためのカンパは、このパンの原材料費にあてさせていただきます。折りばら（福山ローズ）は、人と人をつなぐ不思議な力を持っています

2 恒例となった、京阪百貨店守口店で

の「折りばら体験会」が5月5日に開かれました。今回で7回目です。今回も午前10時の営業開始の瞬間にあつという間に行列ができてしまう大盛況でした。この折りばら会に1回目から続けて5回参加され、折りばらをしっかりマスターされたSさんが、何と私にお礼をと言って、紙袋いっぱい折りばらを持って会場に来て下さいました。Sさんは折りばらでたくさんの人に喜んでもらえることを、本当にうれしく思っておられました。Sさんからいただいたいっぱいの折りばらも、福島県をまわっている庄司さんに送りました。彼の手から一つ一つ、また被災地の人たちの手にわたり、きっと笑顔で受けとってもらえることと思います。

～福山ローズ～

広島県福山市で2003年の「福山ばら祭」の特別プロジェクト「Rose for Peace」として誕生しました。平和で豊かなまちづくりへの願いがこめられています。

メダカ工房・4月は「雑草・刺しゅう展」でした。5月、6月も少し展示作品を入れかえながら、「雑草・刺しゅう展」を続けます。4月の案内で自宅と工房との間にある、とある空き地のことを書きました。ゴミが投げこまれて、それを片付けることもできない……。そう書いてはたと「そんなこと言うてんと、自分で片づけ

ないあかん！」と思い当たり、実行することにしました。さて、どうやって空き地の所有者をさがそうか、と。やっぱり自治会長さんとかに相談かな・・・と思っていた矢先、何と私に自治会役員、それも「環境衛生部長」をという思ってもみなかった展開になり、それからいくつかのやりとりの結果、先日空き地の中に入り、散乱したゴミを片づけることができました。空き地の所有者Nさんは、最近退院され「気になっていた」と、私が一緒に片づけることを受け入れてくださったのです。

編集部補足

岡理恵「メダカジャーナル」より転載。

岡理恵さんが庄司先生に託して下さった折り紙のバラ・「福山ローズ」が、その後思いがけない展開になり、福山ローズの力で今もいっぱい「つながり」の喜びが与えられています。

2011年6月4日礼拝説教（日本キリスト教団西宮公会）

「光あるうちに光の中を歩め」

新免貢（宮城学院女子大学教員）

3月11日の大地震・大津波以来、あと1週間で3ヶ月になろうとしています。復興への動きを印象づける報道が多い中、日々重くのしかかる生活困難と放射能汚染という現実はまだことに厳しいものがございます。16年前関西を襲った地震を体験したみなさんは、そのことを十分に想像できるに違いありません。「避難所暮らしの方々、放射能汚染のゆえに住む家を離れることを余儀なくされている方々に心よりお見舞い申し上げます。愛する人をなくされた

方々に謹んで哀悼の意を表します。亡くなられた方々、行方不明になっておられる方々、今、私がこうして無事に生きていることをお許してください。私は今、そういう思いを込めて、この講壇に立っています。

JR 仙台駅から車で30分、壊滅的打撃を受けた荒浜地区、海水浴場でも毎年賑わう深沼海岸、漁業が人々の暮らしを支えていた閑上地区に行くことができます。閑上港は地震による津波で波止場が破壊されました。閑上地区周辺を一望できる小高

い場所があります。日和山という小さな山です。1分もあれば頂上に行けます。頂上を目指して階段を上っていくと、白いペンキで塗られた木製の慰霊塔がいくつか立てられています。犠牲者の写真も置かれています。お供えの飲み物も置かれています。それぞれの慰霊塔には、くっきりした赤や黒の文字でいろいろな言葉が記されています。「私たちはあなたがたのことを決して忘れません」「何もしてあげられなくて、ごめんなさい」「空の上から私たちを見守ってください」「安らかにお眠りいただけますように」……。犠牲者の元には届かぬ声と知りながらも、人間はその届かぬ声を上げるものです。地震発生時、津波警報が出て、関上地区の有名な交差点はパニック状態になりました。車を捨てて命からがら助かった者もいます。とにかく一目散に逃げた人もいます。「助けてくれ！」という絶叫も聞こえたそうです。流されてきた大木につかまって漂流している最中に自分の子供の顔が思い浮かんで、それを支えに助かったと語る者もいます。津波に流されながら「助けてくれ！」と叫ぶ声も聞こえましたが、どうすることもできなかったそうです。街中では、おばあさんが道にへたり込みました。ビルの中では、水は吹き出て、天井が破れ、大騒ぎだったそうです。福島原発に

も激しい津波が押し寄せていました。CNNでは、いち早くその映像を流していました。私は後からそのことを知りました。その衝撃的な映像を見て愕然としました。素人なりに直感しました、「何も無いはずがない」と。原発の労働者も必死に逃げました。そういうことがすべて同時進行で起りました。地震は地震であり、津波は津波です。それにもかかわらず、「人間を超えたもの」という観念をいきなり持ち出して、それを「福音」として掲げ、「イエスの十字架の死」と結びつける一部のキリスト教関係者たちの神経が私にはわからない。いろいろなところで支えあって成り立っている人々の暮らしが破壊されてしまったという現実の姿に心をいためることのない類のキリスト教はすでにその立場を失っていると申し上げてもよろしいかと思えます。

今回の東日本大震災では、原発事故による放射能漏れに多くの人々がおびえています。福島の小学生は叫んでいます、「私をまもってください、私と私の友達をまもってください」と。漁師たちは叫んでいます、「海に戻りたい。置かれている状況はきわめて深刻だ」と。自然と人々の暮らしが接近している所ほど、壊滅的打撃を受けました。多くの人々の命が奪われ、住む場所が奪われ、そして、生活基盤が崩されました。

「激甚災害」「広域的災害」などといった整った言い回しでは今回の災害の実態を十分に言い表すことはできません。先ほど紹介した荒浜や閉上を含めて、東松島、石巻、雄勝町、名取などの惨状を実際にこの目で見て、言葉を失いました。ぼろぼろにされた家々、大小様々な工場、店舗、民家の前に乗り上げた船、破壊された港、流されてきた大木の数々、ひっくり返った大小様々な車、泥と瓦礫に埋もれた田んぼや道路……。どれもこれもひどい。地域的特徴に支えられて豊かに交流して生きてきた人々とその生活基盤

漁業も農業も が、聖書の言い回し（『士師記』20章25節の「撃ち倒す」）を使えば、文字通り、「地に撃ち倒され」ました。どれもこれもが私の想像をはるかに超えています。破壊され、廃墟と化した町の光景は聖書の古代の物語によく描かれています。それは今の東北や関東の各地のナマの姿となってしまいました。

私は3月14日、被災者支援に使うための銀行口座を開く手続きをしている間、銀行内のテレビを見て初めて、地震・津波がもたらした甚大な被害を知りました。関西にいる仲間たちのほうが、テレビの映像を通して被災状況をよく知っていました。実際の被災地の人々よりも、被災地から遠く離れた人たちのほうが

状況を知っているという有様は、関西の大地震の時も同じです。放射能漏れを心配して、私たち夫婦ともども、神戸に戻ったほうがいと勧める声もありました。私たち夫婦は、その声に力づけられ、仙台に留まることを促す声として、それを聞き取りました。私たち夫婦は昨年の秋以来、働くお母さんの子育てを支援する仙台市の保育ママ制度に参加し、自宅の1階部分を保育室として使っています。地震発生時に私は研究室にいました。子どもたちのことが心配になり、私は自宅に駆けつけました。途中、ブロック塀が壊れている家もあり、道が割れ、でこぼこになり、水が噴き出しているのを見て、とても不安になりました。しかし、幸いにも全員無事でした。子どもたちは、普段はよく泣きますが、大人たちの緊張感のある表情を見て、誰一人泣いていませんでした。抱いてほめて上げました。

しかし、放射能汚染は子どもたちの健康に直結しています。その後、滋賀県に疎開した子どももいます。「人体に影響はない、大騒ぎしないで冷静に！」などといった類の無責任な専門家の発言を、私は一切信用していません。原子炉の炉心の損傷頻度が「約1000万年に1回」とか、格納容器機能喪失頻度が「約1億年に1回」とされているそうですが、現実に取り返しのつかない事故が起



きたではないですか。「約1000万年に1回」「約1億年に1回」などといった数字は、まるで宗教的・神話的表現に聞こえてしまいます。「滅多にないことなのだから、後は事故が起きないことを願うしかない」というのであれば、それはまるで神頼みです。最高水準の科学技術を結集し、二酸化炭素を排出しない究極のクリーンなエネルギー源として、電力供給の重要な部分を受け持つ原子力発電のシステム、それに依存する日本社会の土台がいかにもろいものであるかを実感させられます。そういう意味では、自分の子どもの健康が気になって、役所に電話をかけて、宮城県内の放射能汚染の実態に

関する情報を提供せよと電話で迫った親の素朴な感覚はまともです。その親は、高学歴のエリートとは違って、低賃金の肉体労働に従事している一般市民です。その正直な危機感は当然です。科学的データを掲げる専門家の胡散臭さを見抜く学歴のない人間の眼力（がんりき）を侮ってはいけないのです。

（次号に続く）

### ～今月のいのり～

園庭のオリーブの実はどんどん大きくなっていき、川沿いのヒマワリも背を伸ばしています。目に触れる自然の姿の成長を楽しみ、「もっと大きくなって欲しい」「早く花が咲いて欲しい」と期待を持って、時が過ぎるのを待っています。

そんな風に思えるのは、どれだけ幸せなことでしょうか。

福島第一原発で起こった事故で撒き散らされた放射能には、「早く消えて欲しい」「これ以上増えないで欲しい」と祈るような思いで、時が過ぎるのを待っているのです。

放射能は、簡単には消えません。しぶとく、人や環境に害を与え続けます。人が創ってはならないものを創ってしまったのは罪です。でも、それでも生きつづけたいと願うならば、きっと道は与えられるはずです。神さま、だれよりも子どもたちを、守って下さい。

（大平 有紀）

ところで、これらの文学形態の差異は文化的にも重要な意味をもっているのである。第一のカムイユカリにおいては植物や器具なども物語の主人公となって出てくるのであるが、最も多いのはマタとかオーカミとかシャチとかいったような動物神である。そしてそこでは人間が一定の方式を守って神々を崇拜して、ぬに祭を行ったので、それらの神々が人間の生活を守り、海幸や山幸を与えてくれたというふうに説く物語が多いのである。

(「アイヌ新謡集」知里幸恵編訳、解説・知里真志保)

・「私は天地の作り主、全能の父なる神を信ず・・・」と定義される(使徒信条の)神は、創世記によれば確かに天地を作ったと書かれています。「はじめに神は天と地とを創造された。地は形なく、むなしく、やみが淵のおもてにあり、神の霊が水のおもてをおおっていた」(創世記1章1、2節)。その創造の働きは5日目は以下のようなだったりします。「神はまた言われた、『水は生きものの群れで道、鳥は地の上、天のおおぞらを飛べ』神は海の大いなる獣と、水に群れるすべての動く生きものとを、種類にしたがって創造し、また翼のあるすべての鳥を、種類にしたがって創造された。神は見て、良しとされた」(1章20、21節)。もし神が、全能で天地の創り主だったら、「水は生きものの群れで満ち」とか「鳥は地の上、天のおおぞらを飛べ」などと言うような言葉は、創造の働きそのものにとってどうしても必要という訳ではありません。22節だけで十分です。しかし、

20節のように「生きものの群れで満ち」とか「天のおおぞらを飛べ」と言ってしまうのは、思わず口にしてしまうということなのでしょうが、生きものの躍動がうれしいからに外なりません。遠く、はるかにあおく神ではなく、生きものたちの真っ只中で生きて動く姿として描かれる神なのです。そして、1日の働きを終えた時「良しとされた」と書かれています。それは、労働者がその一日の働きを終えた時に、思わず口から出る言葉そのもののように読めます。

聖書(旧約)の神が、自分の働きのことを自分で定義するのが、出エジプト記20章1～17節の十戒です。その定義は、神自らを定義するものではなく、人の生きる世界に対する関心とその深さの言葉のようにも読めます。「あなたは隣人の家をむさぼってはならない。隣人の妻、しもべ、はしため、牛、ろば、またすべての隣人のものをむさぼってはならない」(17節)。ここにも、遠くはるかにあおく

神ではなく、人とその社会の営みの真っ只中でそれを見つめる神の姿があります。

新約聖書でイエスは、以下のように神について言及します。「ある安息日に、イエスは麦畑の中をとおって行かれた。そのとき弟子たちが、歩きながら穂をつみはじめた。すると、パリサイ人たちがイエスに言った、『いったい、彼らはなぜ、安息日にしてはならぬことをするのですか』。そこで彼らに言われた『あなたがたは、ダビデとその供の者たちとが、食物がなく飢えたとき、ダビデが何をしたか、まだ読んだことがないのか』」(マルコによる福音書2章23～25節)。「また彼らに言われた『安息日は人のためにあるのではない。それだから、人の子は、安息日にもまた主なのである』」(同、27節)。安息日について十戒は、「安息日を覚えて、これを聖とせよ。六日のあいだ働いてあなたのすべてのわざをせよ。七日目はあなたの神、主の安息である

から、なんのわざもしてはならない」(創世記20章8～10節)。十戒では、「七日目はあなたの神、主の安息であるから、なんのわざもしてはならない」とされているにもかかわらず、イエスは「安息日は人のためにあるもので、人が安息日のためにあるのではない」と、言わばそれを退けます。

しかし、十戒が言いたいのは、何がなんでも安息日を守れではなく、「六日のあいだ働いて」後の安息なのです。まず、六日のあいだ、おしまずに働くこと、その後の安息は、その人のためにあると同じ時、その働きを見守る神への感謝を怠ってはならないという意味で安息日なのです。

遠く、はるかにあおぐ神ではなく、人の営みに深くかかわる神なのです。

(菅澤 邦明)



## “ てるてるぼうずてるぼうず～ ”

てるてるぼうずてるぼうず～のわらべうたを歌いながら雨の季節もいっぱい楽しんだ子どもたち。散歩先や園庭でアジサイを見つけたり、そこにいるカタツムリとの出会いがあったり～。家で咲いた大きなアジサイを届けてくれたお友だちもいました。

先日は、雨の恵みをたっぷり受けて育った、畑のたまねぎ、ジャガイモを使ったカレーを全クラスで味わいました。たまねぎの苗うえをしたり、種芋を植えるのを見守ったり～そこから始まって、畑を訪れるたびにその成長を見守ってきました。見守ってきたからこそその収穫の喜びもみんなで感じました。そして、カレー作りには年長の子どもたちも参加して、むいたり切ったり～。自分たちが見守ってきた野菜を使って、自分たちも調理に加わって、そして出来上がったカレーは格別なおいしさだったことでしょう。あっという間に、鍋はからっぽだったのでした。畑の野菜たちの世話から、カレーを作るところまで、園長先生を含め園芸担当のお母さん方、ありがとうございました。

収穫といえば～、幼稚園の裏にあるびわの木も、オレンジの実をつけました。去年はクラスにやられてしまったびわ。今年はその前に～と園

長先生が収穫して下さいました。最初のころに食べたびわは少し酸っぱく、その後も2度収穫したのですが、だんだんと甘みが増しているのがわかりました。収穫したびわをざるに入れて園庭の机の上においていると、クラス関係なく、いろいろな色の帽子の子どもたちが集まって黙々と食べている姿が見られます。そのおいしさに、ずっとその場を離れることができず、いくつもむいては食べ～むいては食べ～...というお友だちもいました。たっぷり味わうことができた今年のびわです。

6月24日(金)、25日(土)の2日間で年長組の子どもたちは、後川へ行ってきました。4月に1度、5月には2度訪れた後川。行く時期によってその季節を感じさせてくれます。

6月の後川。グミの木に真っ赤な実がたわわになっていて、その実を好きなだけ食べさせてもらったり、整備していただいた田んぼ(何も植わっていない～)で思い切り泥んこになって遊ばせてもらったり～ 地元の方々も子どもたちが過ごしやすいように、力を貸して下さいます。

そして、後川で始めて過ごす夜の時間。泊らせていただいた旧後川小学校の近くを流れる川沿いへ蛍を見にいきました。きれいな川にしかない蛍。その蛍が数え切れないほど

飛んでいるのを見たあと、満天の星空を見上げて「あれもほたる？」とつぶやく子どもの姿もあったほど、目の前で飛び交う光の群れは美しく、子どもたちだけでなく、大人たちの心にもいろいろなことを感じさせてくれたひとときとなりました。

2 日目は大野山という山に登りました。暑い中でも涼しさを感じさせてくれる雑木林の中を歩きながら、カニを見つけたりおもしろい形の葉っぱを見つけたり～。どこにいても楽しい発見ができる子どもたちです。頂上での景色を楽しんで下山。山登りでかいた汗を川の冷たい水で洗い流す。そんな贅沢な体験もしました。身の回りにある自然を、手放して楽しむことができる、そんな貴重な時間を過ごした2日間でした。後川で過ごした時間。これからも何度も訪れることと思いますが、そこで過ごした時間がこれからみんなが大きくなっていく時の力になりますように、みんなのこれからの繋がりますように願っています。

子どもたちのために、場所を提供して下さったり、力を、そして心を寄せて下さっている後川の地元の方々に心から感謝いたします。

(山崎 由貴)

2011年6月 あんなこと こんなこと...

## 教会学校から

### 《2011年5月の活動報告》

5月1日(日)

DVD鑑賞会「もうひとつの動物園～絶滅動物物語」を見る

5月8日(日)

お母さんと一緒に幼稚園の畑で野外礼拝

5月15日(日)

みんなで踊ろう!“ マルマル・モリモリダンス ”

5月22日(日)

ストローあめを作って福島県に送ろう! / 統一マダンに参加する

5月29日(日)

石川啄木シリーズ うた、カルタ、クイズで遊ぼう

### 《2011年6月の活動予定》

6月5日(日)

わが街クリーン大作戦

6月12日(日)

花の日合同礼拝

幼稚園、教会学校と合同の礼拝です。礼拝堂にはたくさんの花が準備され、礼拝後、大人たちから子どもたち一人一人へ優しい声かけと共に花が渡されました。

6月19日(日)

こうもりうちわをつくる・お父さんたちがとってくれた幼稚園のびわを食べる

7月15日(金)に行われる「佐渡裕プロデュースオペラ」こうもり「前夜祭」の前に、みんなでこうもりのうちわを作りました。

6月26日(日)

福島の子どもたちにストローあめを送ろう

## 大切な贈り物・津門川 103

### “津門川の掃除をしています”

7年ほど前、津門川沿いに上流へ、幼稚園の親子遠足で歩きました。津門川は、門戸の商店街の中を通り抜けると、畑のきれいな用水路となり、そのうち住宅の側溝の下に姿を隠したりして、そして最後は新幹線公園の脇から、ゴポゴポと勢いよく湧き出ている場所に辿り着きました。その音は、生命力にあふれた、希望に満ちた音でした。そんなきれいな湧水が、ほんのわずかな距離で、汚れた川になってしまうのは大変悲しいことです。

それでも、月一回の川掃除で、魚たちの環境がなんとか守られ、カナダ

藻に花も咲き、カモやサギも遊びに来て、津門川がみんなに愛されて守られていることを感じます。

湧水の姿に出来るだけ近づけることを目標に、みんなで楽しみながら続けていきたいです。

(松本 奈津子)

## つとがわ 編集後記

7月の読書会では「神様2011」「神様」(川上弘美、群像7)を読みました。「アイヌ神謡集」(知里幸恵編訳)の解説で、知里真志保は「...カムイユカルにおいては、植物や器具なども物語の主人公となって出てくるのであるけれども、最も多いのはクマとか、オーカミとか、シャチとかいったような、動物神である。そしてそこでは、人間が、一定の方式を守って神々を崇拜し、ていねいに祭を行ったので、それらの神々が人間の生活を守り、海幸や山幸を与えてくれた、というふうに説く物語が多いのである」と書いています。人以外のモノと、その神と、人およびその神が対等であることを言いたいのだと思います。ですから、アイヌはモノをあなどることはもちろん、その神をあなどるということをしませんでした。

「神様」は、人と熊が共存してしまうという、夢のような物語です。1993年の作品です。「神様2011」は、人と熊とウランが共存してしまうという、夢であったものに、夢のような現実が付け加わった物語です。もちろん、2011年3月11日より後の作品です。

(K)

年長組と訪れた後川で、乱舞する蛍に出会いました。小学校の頃、担任の先生が理科の先生で、蛍の幼虫を育てていたのを一緒に世話していた事が懐かしく思い出されました。あの頃、幼虫の餌になるカワニナを捕りにいった姫路の山の中の川はまだ美しいだろうか~、そこにもまだ蛍はいるのだろうか~そんな事も思いつつ、目の前の蛍たちに感激しました。

(I)

昨年、生まれて初めてホタルを見ました。そして今年は2回も機会が与えられました。数えきれない程のホタルの、その光の美しさにしばらく声

もたちのほほほたるこい~の歌声のかわいさに「なんて幸せな時間を過ごしているんだろう~」と感じたひとときでした。

(Y)

夏至の日が過ぎました。日が長くて時計を見ると「もう19時過ぎてる!」なんてびっくりすることがよくあります。明るさに惑わされてついこの頃です。

(N)

一年の半分が終わる!それは暑い日々到来をしっかりと表しています。毎日毎日暑い!暑い!と言い続けるんだろうな。暑い!にピッタリは何と言ってもヒマワリ。溢れだしそうになった家の絵本たちに押し潰される前に、100箱ほどを移住させた。移住するまで、移住した先での片づけ、そして草抜きなどには目もくれなかった約1名が、これだけは積極的な働きをしたのがヒマワリの種まき。それが何とこのヒマワリよりもみんな大きくなっている。で、夏が楽しみに。

「マルモ」がよいよ最終回。ふとテレビをつけてしまった1回目、その次の週も見て、あまりの面白さについハマリ、まあ宣伝することしきり。そして今やみんなでマルモリダンス。自信たっぷりに踊る子どもたちみんながかわいい。中学生も高校生もみんな踊る、不思議なダンス。

ところで、そういえば てっぱんダンス は遠い昔のことになってしまった。

(J)